

## 34

輸血部門の医療従事者における  
献血普及率の調査

財団法人献血供給事業団

柘原 晋, 山部光男, 野島正敏, 記井良仁,  
吉田知弘, 柏木修次

【目的】当団は設立以来、輸血用血液の供給だけでなく血液事業の円滑な推進を目指し活動してきた。近年では血液供給バッグに献血を呼びかけるメッセージを載せるなど独自の普及活動を行うだけでなく、献血者の確保しにくい時期に職員を献血ルームの応援に派遣している。今回、医療従事者に血液事業への意識を調査することが、今までの普及活動を評価し、今後、より効果的・効率的な手段を検討する資料になるものと考え、アンケート調査を実施したので報告する。【方法】平成17年度、都内血液供給量上位50医療機関の輸血部門の医療従事者を調査対象とし、書面によるアンケート方式とした。アンケート作成にあたっては、複数選択式を多くし、簡単に回答してもらえるような内容にした。実施にあたっては、対象医療機関に事情説明をし、賛同・了解の得られた医療従事者を対象とした。【結果・考察】50医療機関すべてで協力が得られ、総数312名（医師10名・薬剤師4名・臨床検査技師275名・看護師5名・事務職9名・その他9名）から回答を得た。献血経験の問いには77%（240名）で献血経験があると答え、その中で献血経験1回は16%（38名）、2～5回は38%（92名）だった。また、血液不足には、常々不足を感じる13%（42名）、時々感じる67%（210名）、感じない17%（52名）だった。当団が“献血思想の普及向上のための活動”を行っていることには68%（212名）が知っていると言った。その他に血液事業の現状や今後への希望など、非常に多くの貴重な意見・要望が寄せられた。【まとめ】今回の結果は、医療従事者が献血に対し非常に高い理解を示していることを表した一方、献血経験5回未満の方が50%を超える等、更なる普及活動の余地があると思われた。今後は、医療機関を毎日訪れる当団として医療従事者に献血への更なる理解を求める等の普及活動を推進したい。

## 35

蛍光ビーズ法を応用した高感度PC-HLA交差  
適合試験法の開発東京都赤十字血液センター<sup>1)</sup>東京都西赤十字血液センター<sup>2)</sup>藤原孝記<sup>1)</sup>, 関根みゆき<sup>1)</sup>, 島野佳恵<sup>1)</sup>,  
礪波 薫<sup>1)</sup>, 田中秀則<sup>1)</sup>, 内川 誠<sup>1)</sup>, 佐竹正博<sup>2)</sup>,  
中島一格<sup>1)</sup>

【目的】HLA精製抗原を用いた検査法が開発され低力価HLA抗体が検出可能となり、血小板輸血不応との相関が確認されている。しかし、濃厚血小板HLA「日赤」の出荷可否を判定する交差適合試験は、AHG-LCT法を標準法としているため最終的な確認検査として十分な検出感度が得られていない。我々は、白血球に被検血清を反応させた後、可溶化し、HLAクラスIモノクローナル抗体にて抗原抗体複合物を捕捉して濃縮・精製するantigen capture法と蛍光ビーズ法を応用した高感度HLA抗体検査法を開発し、交差適合試験およびHLA抗体検査に関する有用性について検討した。

【方法】蛍光ビーズ：HLAクラスIモノクローナル抗体(w6/32)、ヒトIgG、BSAを結合させた3種類の蛍光ビーズを作製した。被検血清：低力価IgG抗体が検出された患者血清30例およびHLA抗血清8例を用いた。検査方法：96プレートにEDTA加全血50 $\mu$ Lを加え、溶血・洗浄後、血清を25 $\mu$ Lずつ加えて37 $^{\circ}$ C、30分反応。洗浄後、lysis bufferにて可溶化し、3種類の蛍光ビーズおよびPE-抗ヒトIgGを加えて37 $^{\circ}$ C、30分反応。洗浄後、Luminexにて蛍光強度を測定して抗原抗体複合物を検出した。判定：蛍光強度からIndex値を算出し、2以上になった場合を陽性とした。

【結果】低力価IgG抗体が検出された30例は全て陽性であった。検出感度はAHG-LCT法と比較して4～8倍高感度であった。検査所要時間をAHG-LCT法と比較すると30分以上短縮することが可能であった。

【考察】今回開発した方法は、検出感度、検査所要時間、全ての行程をプレートで行う操作性、判定の客観性などの点で有用な方法であった。さらに、自動化が可能であることからAHG-LCT法に変わる新しい交差適合試験法として期待できる。